



気候変動と環境経営(14)

無形資産の重要性の高まり

ざっくり理解する気候変動 井川夕慈著より

2月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2026年2月21日(土)

かつて、1930年代から1970年代までの製造業が産業の中心であった時期には、工場や産業設備等の有形資産への投資が企業価値の創出にあたり、重要な役割を果たしていた。

また、この時期には、生産、販売活動の効率性を測る指標として財務情報が重視されている。

これに対して、1980年代以降、サービス業、金融業への比重が移り、有形資産が企業価値の創出に占める割合は徐々に低下をはじめ、代わりにブランドや知的財産権などの無形資産が企業価値の源泉として重視されるようになった。企業活動もこうした変化を反映して、無形固定資産への投資の比重を高めてきた。

米国の例(S&P500)であるが、それまでと異なり2000年代から無形資産への投資割合を大きく上回り、有形資産への投資割合は1975年の83%から2015年には16%まで低下したといわれ、そのグラフ化した図を見ると、明らかな変調に驚く。

企業の無形固定資産への投資は、有形固定資産とは異なり、会計上は基本的には期間費用として計上され、会計上は資産に計上されない。

例えば、ブランドの維持のための宣伝費は、期間費用とされることが多い。

(参考:統合報告書で伝える価値ストーリー、商事法務発行)